小鍛冶

前

大臣（ワキヅレ）　橘道成

ワキ　小鍛冶宗近

シテ　童子

後

ワキ　前に同じ

シテ　稲荷明神

地は　山城

季は　雑

大臣詞「是は一条の院に仕へ奉る橘の道成にて候。さても今夜帝不思議の御告ましますにより。三条の小鍛冶宗近を召し。御剣を打たせらるべきとの勅諚にて候ふ間。唯今宗近が私宅へと急ぎ候。如何に此屋の内に宗近が在るか。

ワキ詞「宗近とは誰にて渡り候ふぞ。

大臣「是は一条の院の勅使にて有るぞとよ。さても帝今夜不思議の御告ましますにより。宗近を召し御剣

を打たせらるべきとの勅諚なり。急いで仕り候へ。

ワキ「宣旨畏つて承り候。さやうの御剣を仕るべきには。我に劣らぬ者相鎚を仕りてこそ。御剣も成就候ふべけれ。是は兎角の御返事を。申し兼ねたるばかりなり。

大臣「実に〳〵汝が申す所は理なれども。帝不思議の御告ましませば。頼もしく思ひつゝ。早々領掌申すべしと。重ねて宣旨ありければ。

ワキ「此上は。兎にも角にも宗近が。

地「兎にも角にも宗近が。進退こゝに窮まりて。御剣の刃の。乱るゝ心なりけり。さりながら御政道。直なる今の御代なれば。若しも奇特の有りやせん。それのみ頼む心かな。〳〵。

ワキ詞「言語道断。一大事を仰せ出だされて候ふ物かな。かやうの御事は神力を頼み申すならではと存じ候。某が氏の神は稲荷の明神なれば。是より直に稲荷に参り。祈誓申さばやと存じ候。

シテ詞「なふ〳〵あれなるは三条の小鍛冶宗近にて御入り候ふか。

ワキ「不思議やなゝべてならざる御事の。我名をさして宣ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ「雲の上なる帝より。剣を打ちて参らせよと。汝に仰せ有りしよなふ。

ワキ「さればこそゝれに付けても猶々不思議の御事かな。

剣の勅も唯今なるを。早くも知し召さるゝ事。返すゞも不審なり。

シテ「実に〳〵不審はさる事なれども。我のみ知ればよそ人までも。

ワキ「天に声あり。

シテ「地に響く。

地「壁に耳。岩の物いふ世の中に。〳〵。隠れはあらじ殊に猶。雲の上人の御剣の。光りは何か闇からん。唯頼め此君の。恵みによらば御剣も。などか心に叶はざる。などかは叶はざるべき。

地クリ「それ漢王三尺の剣。居ながら秦の乱れを治め。又煬帝がけいの剣。周室の光りを奪へり。

シテサシ「其後玄宗皇帝の鍾馗大臣も。

地「剣の徳に魂魄は。君辺に仕へ奉り。

シテ「魍魎鬼神に至るまで。

地「剣の刃の光りに恐れて。其寇をなす事を得ず。

シテ「漢家本朝に於て剣の威徳。

地「申すに及ばぬ奇特とかや。

クセ「又我朝の其始め。人皇十二代。景行天皇。詔の御名をば。日本武と申しゝが。東夷を退治の勅を受け。関の東も遥かなる。東の旅の道すがら。伊勢や尾張の海面に。立つ波までも。帰る事よと羨み。いつか我も帰る波の。衣手にあらめやと。思ひつゞけて行く程に。

シテ「こゝやかしこの戦ひに。

地「人馬巌窟に身を砕き。血は涿鹿の川となつて。紅波楯流し。数度に及べる夷も。兜を脱いで矛を伏せ。皆降参を申しけり。尊の御宇より。御狩場を始め給へり。頃は神無月。二十日あまりの事なれば。四方の紅葉も冬枯の。遠山にかゝる薄雪を。詠めさせ給ひしに。

シテ「夷四方を囲みつゝ。

地「枯野の草に火を懸け。余焔しきりに燃え上り。敵攻鼓を打ちかけて。火焔を放ちてかゝりければ。

シテ「尊は剣を抜いて。

地「尊は剣を抜いて。あたりを払ひ忽に。焔も立ち退けと。四方の草を薙ぎ払へば。剣の精霊嵐となつて。焔も草も吹き返されて。天にかゝやき地に満ち〳〵て。猛火はかへつて敵を焼けば。数万騎の夷どもは。忽ちこゝにて失せてんげり。其後四海

治まりて。人家戸ざしを忘れしも。其草薙の故とかや。唯今汝が打つべき。其瑞相の御剣も。いかでそれには劣るべき。伝ふる家の宗近よ。心安く思ひて下向し給へ。

ワキ詞「漢家本朝に於て剣の威徳。時に取つての祝言なり。さて〳〵御身は如何なる人ぞ。

シテ「よし誰とても唯頼め。まづ〳〵勅の御剣を。打つべき壇を飾りつゝ。其時我を待ち給はゞ。

地「通力の身を変じ。通力の身を変じて。必ず其時節に。参り会ひて御力を。附け申すべし待ち給へと。夕雲の稲荷山。行方も知らず失せにけり。〳〵。

（中入）

ワキ「宗近勅に随つて。即ち壇に上りつゝ。不浄を隔つる七重の注連。四方に本尊を懸け奉り。幣帛を捧げ。仰ぎ願はくは。宗近時に至つて。人皇六十六代。一条の院の御宇に。其職の誉れを蒙る事。是れ私

の力にあらず。伊奘諾伊奘冊の。天の浮橋を踏み渡り。豊蘆原を探り給ひし。御矛より始まれり。其後南瞻僧伽陀国。波斯弥陀尊者よりこのかた。天国ひつきの子孫に伝へて今に至れり。願はくは。

地「願はくは。宗近私の高名に非ず。普天率土の勅命によれり。さあらば十方恒沙の諸神。唯今の宗近に。力を合はせてたび給へとて。幣帛を捧げつゝ。天に仰ぎ頭を地に付け。骨髄の丹誠。聞き入れ納

受せしめ給へや。

ワキ「謹上再拝。

地「いかにや宗近勅の剣。〳〵。打つべき時節は虚空に知れり。頼めや頼め唯頼め。

後ジテ「童男壇の上にあがり。

地「童男壇の上にあがつて。宗近に参拝の膝を屈し。さて御剣の金はと問へば。宗近も恐悦の心を先として。金取り出だし。教への鎚をはつたと打てば。

シテ「ちやうと打つ。

地「ちやう〳〵〳〵と。打ち重ねたる鎚の音。天地に響きておびたゝしや。

ワキ詞「かくて御剣を打ち奉り。表に小鍛冶宗近と打つ。

シテ「神体時の弟子なれば。小狐と裏にあざやかに。

地「打ち奉る御剣の。刃は雲を乱したれば。天の叢雲とも是なれや。

シテ「天下第一の。

地「天下第一の。二つの銘の御剣にて。四海を治め給へば。五穀成就も此時なれや。即ち汝が氏の神。稲荷の神体小狐丸を。勅使に捧げ申し。是までなりと言ひ捨てゝ。又村雲に飛び乗り。又村雲に飛び乗りて東山。稲荷の峰にぞ帰りける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著